

研究ノート Research Note

緑化の居酒屋談話（番外編） 面倒ですよね学名の表記方法の巻

中村 剛

日本植生株式会社 (info@nihon-shokusei.co.jp)

居酒屋グリーンで田中淳氏と本号の記事について打ち合せしていたところです。忘れないうちに着手せねばと、足早に帰宅したのですが、突然気が変わって、今回は学名の表記方法について解説することにしました。この原稿を目にした田中氏は、今頃びっくりして椅子から転げ落ちていることでしょう。申しわけない。

さて、日本緑化工学会は植物を取り扱う学会ですから、論文や技術報告には、ほとんど何かしらの植物（近年は動物も多い）が登場します。そして当学会の執筆要領（2022年11月1日改訂版）では、その植物、動物の種名には、学名を付記することを求めています。以下に執筆要領から抜粋します。

「植物、動物等の生物の和名はカタカナ書きとする。初出箇所には学名を命名者まで必ず記載し、学名はイタリックとする。（後略）」

学名に馴染みある研究分野の方にとっては、常識的と思われる事柄なのでしょうが、そうではない分野の執筆者にとっては、この3行に示されざる数々のルールで悩まされることとなるのです。本稿では、普段学名を使う機会が少ない一技術者として、執筆者目線でその表記方法のおさらいをしたいと思います。園芸品種と雑種、また植物以外の分類群については割愛します。もしかすると、編集委員会とは異なる見解があるかも知れませんが、課題提起としてご容赦ください。誤認やご異議があればご指摘ください。本稿が2ページに収まることを願って、まずは最近受けた質問から。

Q.1 技術報告にも学名は必要なのでしょうか。

A.1 現行の執筆要領では、論文・技術報告の適用区分が示されていないため、技術報告にも学名が必要と解釈できます。この前に使われていた大会特集号【論文・技術報告】原稿執筆要領（2022年度版）では、次のように記されていました。

「[技術報告]学名をすべて記載するとページが超過する恐れがあるときには、編集委員会の判断により学名を省略してもよい。ただし慣用名（和名等）により表される種を明確にするために、参照した図鑑を引用すること。引用する図鑑は信頼性の高い冊子体のものとする。」とあります。ともかく技術報告の本文で数多くの学名が書き切れない場合は、編集委員に相談してみてください。

Q.2 「初出箇所」で表題から、本文から？

A.2 執筆要領には「表題は、原則として40字を越えないものとする。表題の学名表記が、この原則をうけて困難な場合は表題ではなく本文の初出時に学名をイタリック表記するこ

と。」とあります。過去に日本緑化工学会誌に発表された論文と技術報告には、当然のことながら、植物名を含む表題が多数みられます。この中には学名を併記したものもありますが、そうでないものの方が多くみられます。そして学名を併記した表題の大半が40文字を越えています。中には40文字に収めるための苦渋の判断でしょうか、学名の命名者（詳しくは後述します）を省いたものもみられます。ダブルスタンダード化していることから、表題の学名はなくしても良いのではないかと、個人的には考えますが、皆さまいかがでしょうか。

Q.3 イタリックてなんですか（20代 会社員）。

A.3 では、これから本題に入ります。

Level.1 学名の構成と和名

世に認められたすべての植物には、その種を論文で発表した命名者によって学名が与えられます。学名は「属名」+「種小名」+「命名者」から構成されます（例.1）。

例.1 トチノキ *Aesculus turbinata* Blume
種名 属名 種小名 命名者

昔学校で習ったリンネの二命名法です。学術研究以外の場では、学名とは別に慣用的な名称として種名（和名あるいは標準和名）が用いられます。種名は、同一種に対して複数の呼称が存在したり、異なる種に同一の名称が用いられりする場合があります。混乱を招く恐れがあります。そのため、論文や技術報告では研究対象とする植物を厳密に特定することを目的として、種名に必ず学名を付記することとしています。

Level.2 斜体・正体と命名者

「イタリックてなんですか」そうでした。傾いた書体（斜体）のことです。例.1をご覧ください。属名と種小名はイタリックです、命名者は傾いていません。これはローマン（正体）と呼ばれる書体です。

分類学的な見直しにより学名は、時代とともに変化します。学名に付記する命名者には、その種を最初に論文発表した命名者を括弧で囲んで表記します（例.2）。

例.2 オオイタドリ

Fallopia sachalinensis (F.Schmidt) Ronse Decr.
属名 種小名 最初の命名者 命名者

属名と種小名だけをイタリックで表記します。オオイタドリは Schmidt さんが最初に発表したようです。その後タデ科の研究者である Ronse Decraene 氏が分類を再考した結果、現在の学名となりました。古い図鑑ではかつての学名が見られることでしょう。

ここでは学名に付された Decraene 氏の名前が Decr.と略記されています。国際的な命名者データベース³⁾により、この略記は一応定められていますが、使用する図鑑によって用いられる略記が異なる場合があります。例えば現在シーボルトは, Siebold に表記が統一されていますが、過去の図鑑では Sieb.と略記されるものもあります。同一の論文や技術報告の中で、学名中の命名者に不整合が生じないように、引用する図鑑や資料を統一することが肝要です。

Level.3 本文中の括弧：全角・半角

執筆要領では、本文中の括弧は全角を用いることとされていますが、命名者を囲む括弧は、学名中なので半角の括弧を使います。普通、本文中では種名の後に括弧書きで学名を示しますが、この場合学名を囲む括弧は全角、学名中の括弧は半角となります(例.3)。ご注意ください。

例.3 マテバシイ (*Lithocarpus edulis* (Makino) Nakai)

Level.4 下位の分類：亜種・変種・品種

ひとつの種の中には、いくつかの亜種(羅: *subspecies*)、変種(羅: *varietas*)や品種(羅: *forma*)が見いだされることがあります。ちなみに「羅」はラテン語です。この場合は、「命名者」の後に「亜種名・変種名・品種名」を続けて表記します。亜種・変種・品種は、それぞれ *subsp.*, *var.*, *f.* と略記するのが一般的です。付与された、亜種名・変種名・品種名はイタリックで表記します。一方, *subsp.*, *var.*, *f.* はローマン(正体)です(例.4)。面倒ですね。

例.4 クズ

Pueraria lobata (Willd.) Ohwi *subsp. lobata*

属名 種小名 命名者 亜種 亜種名

なお、本稿で取り上げない、栽培品種名(羅: *cultivar*)や、通称として用いられる品種(例えば‘タマリユウ’)は、ここの品種(*forma*)とは別ものです。

Q.4 引用する図鑑は何がお勧めですか。

A.4 人それぞれですが、多くの種がでてくる論文・技術報告では、ハンドブックでなく、概ね全ての種類が網羅されている大きな図鑑が良いですね。昔は複数の図鑑が刊行されていましたが、現在では平凡社の『改訂新版 日本の野生植物』²⁾ ほぼ一択です。講談社の『Flora of Japan』もありますが、ここまで読み進めてくださった方の中で、この書籍を手元にお持ちの方は、おそらくおられはしまい。

先述の執筆要領(2022年度版)では冊子体による引用を求めています。現在ではウェブ公開されている植物名データベースを用いることが増えています。日本国内にみられる植

物ですと、YList³⁾が植物の研究者や関連技術者の間でスタンダードとなりつつあり、種名・学名をこのデータベースによったとする論文や調査報告書をよく目にします。同じくウェブ公開されている『環境省植物目録』については命名者の記載がないため、ここでは言及しません。いよいよ紙面が残り少なくなってきました。

Level.5 同定できない種の表記をどうしよう。

私はこれまで緑化法面に生える植物の調査をしてきましたが、現場でも持ち帰って調べても、なお名前のわからない種類に出会うことが多々あります。この場合、おのれの同定スキルを超えて、無理に学名を与えることだけは避けたいものです。そうすると「イネ科の一種」とか「スゲ属の一種」とかが頻出するわけですが、これらには科名、属名を記載し、その後に種(羅: *species*)の略記である *sp.* をローマン(正体)で付記します。この場合命名者は不要です(例.5)。

例.5 イネ科の一種 *Poaceae sp.* (科名はローマン)
スゲ属の一種 *Carex sp.* (属名はイタリック)

例えば「ヤナギ属 *sp.*」のように、種名に *sp.* を付した記載が公式な調査報告書などでも普通に見られます。現場で記帳する際にはこうした記入をしますが、おそらくラテン語に由来する *sp.* は学名に付するものでしょうから、正しくは「ヤナギ属の一種」とすべきでしょう。

なんだかよくわからない複数の種が含まれる場合は、分類群の学名に *spp.* を付記します。研究対象が複数の種を取り扱う場合にも、この表記が用いられます。しかし種名欄に「キク科の複数種」などという記載は見たことがないため、日本語ではどのように表現するのが良いのでしょうか。ぜひどなたかご教示ください。

最後に、分類群すら不明な種(不明種)の学名欄に *Unknown sp.*となぜか英語で記載されているのを良く目にします。これが正式な表記なのかどうかはよくわかりません。

この後に続く Level 6, 7, 8…は、半ば私の苦労話や失敗談のようになってしまいますので、続きは居酒屋グリーンで直接お話しできればと思います。

科学の進歩は喜ばしいことですが、近年は分類体系の見直しが加速度的に進んでいます。カエデ科が消滅し、ユリ科は解散状態となるなど、種名や学名の変化もめまぐるしいものです。植生調査に携わる技術者として、時代の変化に取り残されぬよう研鑽を続けねば……などと考えを巡らせているうちに夜が明けてきました。本稿はここまでといたします。

参考資料

- 1) International Plant Names Index. <http://www.ipni.org/> (参照: 2026年2月25日)。
- 2) 大橋広好ほか 編 (2015-2017) 改訂新版 日本の野生植物, 平凡社
- 3) 米倉浩司・梶田忠. “BG Plants 和名一学名インデックス (YList)” <http://ylist.info> (参照: 2026年2月25日)。